
勇者の一日

秋野 功成

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者の一日

【Nコード】

N3079F

【作者名】

秋野 功成

【あらすじ】

勇者の一日、それはまず起床から始まり就寝に終わる。※なんてことない日常を勇者バージョンで書いてみました。ファンタジーらしさはありません。

勇者の起床

彼（勇者）の一日は、起床から始まる。

ジリリリリン〜！

けたたましい目覚まし時計のベルが鳴る。

ジリリリリン〜！

本職を『勇者』とする彼だが、今の時代、悪がはびこってない。そのため、都合上家庭的な生活を強いられている。

ジリリリリ：

起床から彼の一日が始まるのだが、なかなか目覚める気配がない。
ジリリリリリン〜！

「う〜ん…」

起きる気配を見せる勇者。

だが、やはり起きるつもりはないらしい。

結局、彼が起きたのは、魔法使いである妹に罵詈雑言を浴びせられてからだった。

「起きろ兄^{あに}い！」

魔法使いというと、高貴というイメージが昔からあった。

しかし彼女の場合は、生まれ育った環境の悪さゆえ、実力もイメージも魔法使いのそれとはかけ離れている。

「うん…？ 恵^{けい}…か」

眠い目をこすりながらも、布団からでる気配を見せない勇者。

「起きいや、いつもいつも寝坊しやがって。その目覚ましで近所の愚民たちに私たちの存在がバレるかも知れないじゃないか。何故起きん！」

「わかったよ、眠いから寝るんだ」

「起きい！」

恵がそう吐くと、木の棒のようなものを手に持った。殺気を感じた勇者は、即座にベッドから逃げる。

「ロフアイ！」

恵がそう言うのと、木の棒の先から、火をまとった石ころが現われた。

そして、その石は勇者の目覚まし時計を狙い、衝突し、予想外にベッドまでも破碎した。

魔法使いとかけはなれた『魔師』に匹敵する力を持つ恵は、初級魔法ですら威力が並ではない。

「：相変わらずおっかねえな」

「目は覚めたか？ 兄い」

「ああ、起きた。起きたとも。布団のぬくもりが、一瞬で冷や汗に変わるといふ代償はあったけどな」

「ならばいい」

恵は、木の棒をポケットにしまった。



勇者の朝には、ペットの餌やりが欠かせない。

エサは主に生きた肉なのだが、平和に溢れた現代でそれを手にいれるのは困難。

よって、最近は野菜などの方向に変わっている。

「ほら、豆だ」

ゆうしやは、どらごんにまめをあたえた。

どらごんはおこった。ひをふいた。

勇者はそのライターほどの大きさの火を、皿で受け止めた。

豆は焦げたが、皿は陶器（熱に強い）なので、勇者にダメージはない。ドラゴンは負けじと火を吐き続けるが、子供ほどの大きさの体軀では、五秒が限界だった。

「豆をバカにするのか、竜紀^{たつき}」

「キュー…」

竜紀は、錬金術から形成されている。

現代では廃止された錬金術だが、恐ろしいことに勇者の妹である恵が独学で創っている。

それはドラゴンの体自体にリミッターをかけることまで成功させるほどだ。

その結果、ドラゴンでありドラゴンでない

「ペット」として竜紀は創られた。

ただ、竜紀という名前を創ったのは勇者である。

勇者はこのドラゴンが転生（生まれ変わりのこと。徳の高い生物がなせる業）することを前提として名前をつけたらしい。

転生しないのを知ったのは名をつけてから一週間後だが、その時には呼び名が定着してしまっていた。

「ギャース！」

竜紀が吠えた。

そして、豆に向かって火を吐く。もはや焦げるなどの程度ではなく、それは灰になっていった。

「なんてもったいないんだ」

勇者は決してけちな性格ではない。

しかし、竜紀のこの行動にはどうにも腹を立てずにはいられなかった。

「食わぬなら、殺してしまえっか」

腰にたずさえた剣（日本刀に近い）を抜き、竜紀にそれを向ける。

竜紀はそれに向かって火を吐く。だが所詮ライター程度であり、また勇者である彼にはそれを剣で受け止めるなど容易なことであった。

「ふん」

竜紀が火を吐き尽くす。

それを見計らった勇者は、火で熱せられた剣を竜紀にむける。

「罰を与えてやる。背中を向けろ」

「キュー…」

竜紀は、言われたとおりに背を向ける。

真っ赤な体にふさわしい赤い羽が、まるで風に揺れる花びらのように舞っていた。

「相変わらず体格だけは人間に勝るんだな」

「キュー」

「それはともかく、罰だ」

勇者は、剣先をバケツに入っていた水で冷やした。

そして、バケツを持って、竜紀の背中に向かって。

「キューー！」

水をかけた。

ドラゴンの水が苦手である。

これは皮膚上に存在する呼吸器がつまるからだ。

ドラゴン特有のこれがつまると、火を吐くためのエネルギーが摂取できない。

肺気管があるので窒息というわけではないが、一気にエネルギーが奪われるため、どっと疲れが襲う。

この対処法は、エネルギー摂取。すなわち食べ物を食べることだ。

「それでも、豆を食わんか？」

勇者は代えの豆を、腰にかけた巾着からとりだす。

だが竜紀は、仕方ないから食ってやろうのような目で、勇者を見る。

「ほれ」

豆を皿にいれ、竜紀に差し出す。

何度か食べるのを嫌がった竜紀だったが、勇者が朝食に呼ばれて
去ったあとは、むさぼるように食べたのであった。

後に、それをなぜか影で見っていた父親が

「これがツンデレか」

などと、変な解釈をするのであった。

勇者の朝食

勇者たるもの、いかなる時でも気を抜くな。

そう祖父から学んだ勇者。

いかなる時でも：それは、朝食の場合も指すのである。

「さあ勇者、今日は特別メニューだ」

「：母上、察しはつきますが、まさか毒などは…」

「当然、盛っている」

勇者は、朝食とにらめっこをした。

白米、味噌汁、魚の白身——まさに日本食だとしかしいようがない。見た目もさほど悪い物ではない。

祖父（伝説の勇者）からの教えで、ある程度の毒の分け方はできる。

だが今回のように、朝食の時点で毒を盛られることはなかったため、勇者は面食らってしまった。

「どうした。たまにはこのように変わった訓練を試みるのも良かろう？」

勇者の母親は結構性悪&男勝りである。

しかし勇者の生まれる前は、近所でも評判の良妻であり、それを狙うヘンタイも少なくなかったとか。

何が転じてこうなったのかは、夫ですら知らない。

「母上：今は、無理です」

「何故だ？祖父のような立派な勇者になるのではないのか？」

勇者は母親にだけは頭が上がらない。それでも弱弱しい声を出しつつ、反抗をする。

「いえ：いつものような毒ならば、食らっても自分が苦しむだけです。ですが」

「なんだ？」

「このあとは、学校です」

「だからなんだ？」

「その、えと、勉強に支障が出ると…」

「ふむ、ならば致し方ないな」

母親があっさり引き下がるのには訳がある。

一つは平民に存在を知られないため。

そしてもう一つは、『差を持たせない』ためだ。

かつて勇者のお供的存在の『魔法使い』や『闘士』は、彼と同様に普通の生活を送っている。

だがその者たちに劣ることは勇者ゆえに許されない。

たとえば『勉強』ですら、劣ってはいけないのである。

「ありがとうございます」

勇者が母親に感謝してるあいだ、目の前にあった朝食が片された。すなわち全てが毒盛りだったのである。あらかた察しはついていたが、もし気付かずに食べていたら——と思うと、勇者と言えど冷や汗をかかずにいらなかった。

今日の勇者の朝食は、栄養あるバナナ一本になった。



勇者の朝には、鍛練がかかせない。

通常より大きく重い剣を構え、庭にある『かかし』に向かって切りかかる。

しかし、振り降ろした瞬間、かかしは剣を避け、勇者の右側にまわる。

ちなみに、この『訓練用かかし』も、妹の恵が創ったものである。

「ちっ」

剣先が地につく前に刃の向きをかかしに向け、剣をふる。

ぶおん、と風をきる音がする。はずした。

かかしはその音がする前に、勇者の頭上に飛び乗った。
足が木の棒なので、頭上に木の棒がざくりと刺さる。

「痛ッ」

かかしとはいえ、重さは二十キロある。

その結果、勇者の頭からは血がどくどくと流れ、顔面は血だらけとなる。

まるで『今さっき中ボスと闘ってきました』のような状態だ。

通常の人間ならショックを起こす血の量だが、勇者は慣れている。

「なかなかやるじゃないか」

ふらつき、今にも倒れそうになっている状態の勇者。

しかし、彼はそれでもかかしに剣を向ける。

「行くぞ！」

勇者は鍛えあげた脚力を使って、一瞬にして間合いをつめる。

かかしとの距離、わずか一メートル。勇者は剣を横に振った。

だが振り抜かれる前に、間合いをとるかかし。

「速いな。だが、間合いをとるのは俺の方が速い。」

勇者は構え方を変える。

腰をやや屈め、腰辺りに持ち手を近付け、剣先をかかしに向ける。

すなわち、『突く』。

「出血がひどくなってきたな。ケリをつけてやっ…とりゃ！」

勇者は再びその脚力で、跳ぶように間合いを詰める。

だが距離が二メートルになったとき、かかしが急に体を右に倒した。

目標を見失った。

そこを狙って、かかしは体を急旋回させ、左手で勇者の首を打った。

ゆうしやはたおれた

なかま（※母親）はあかいくすりをつかった

ゆうしやはかいふくした

かかしに見事敗北した勇者は

「ちっ、明日こそは倒してやる」

と、完治したその姿で毒を吐くのであった。

もうすぐ、起床から一時間。

支度を終えた勇者は、学校に向かった。

勇者の登校（始）

普通の生活をする。

それは弱冠十三歳の勇者にとっても必要なことだった。

「さて、と」

勇者の向かいの家には、鎖に繋がれてない凶暴犬がいる。

なんでそんなのが繋がれてないのか不思議であるが。

飼い主は、

『自由にさせてあげたい、それに誰も怪我してないじゃない』
というのである。

確かに誰も怪我はしていない。むしろするはずが無い。

恵は魔術で犬の動きを封じて登校し、母親はただしれぬ気配で犬を圧倒する。父親は存在してるのかわからない影の薄さで犬に見つからない。

だが勇者の場合は特殊な能力はなく、毎度毎度犬と格闘するはめになる。

そのおかげと言うべきなのか、瞬間的に犬を昏倒させる術は身につけていた。

「まあそんなもんつけても意味ないんだが…」

もはや日課であるように、犬を丁寧かつ即座に昏倒させる。

しかし…

「隣の息子さんじゃない！アンタが毎回私の犬を気絶させていたのね！」

運悪く、飼い主であるおばさんに見つかった。

おばさんは今の勇者では倒せないほどの強敵。赤い薬（回復アイテム）を所持していない状態で怒らせると命は無い。

下手に喧嘩を売っては駄目だ。

「俺じゃありません」

ごまかしてみることにした。

「うそ言うんじゃないやありません。この目で見たんだからね!」

「何をですか?」 おぼさんは自分の犬を指差す。

「私の犬を気絶させるところをよ!」

しまった。見られたか。

というか犬が昏倒させられるのをわざわざ見てたコイツはサドか。色々考えたのち、苦々しい顔をして、勇者はこの場を回避する方法を考え始めた。

たたかう

まほう

にげる

↓走って逃げる

ゆうしゃは、はしってにげた
にげられなかった

「逃がさないよ!」

「は、離せ」

おぼさんは事前に勇者の襟首をつかんだ。

勇者は襟首を軸になぎ倒されるように転んだ。

勇者は10のダメージを食らった。

「反省しなさい」

「俺は悪くない、無実だ、黙秘権だ」

「…教育が必要みたいね、いろんな意味で」

おぼさんは片手で勇者を高々と持ち上げ、地に叩き付ける。

「がはっ」

飼い犬は飼い主に似ると言う。その言葉が勇者の脳裏によぎった。勇者が地に叩き付けられた時の衝撃はやさしいものではなく、少

なくとも二百キロの勢いはあった。

「この：ババア：」

だが叩き付けられた瞬間、襟首を掴む手が緩んだ。そこを見過ぎずに、おばさんから離れて距離を置く。

おばさんはしまったという顔をしたが、それも一瞬だけ。すぐに不敵な笑みを浮かべた。

「まさか」

周囲を見渡し、おばさん以外の気配を探す勇者。

犬は気絶させたし、この時間帯に勇者の天敵の警官は歩いてない。気配がないことを確認すると、再びおばさんに向き直る。

だが笑みを浮かべたままで、なにやら悪寒が走る。

勇者は問う。

「何を、たくらんでやがる」

だがおばさんは問いに答えず、不敵な笑みを浮かべるだけだった。

「くそっ」

・勇者の選択肢

満を持して逃げる

怯えながら逃げる

警戒しつつ逃げる

↓にげる

勇者は逃げた。

逃げ切れた。

「：おばさんって、バケモノかよ：」

息を切らしたわけじゃない。だがどうにも冷や汗がとまらない。

バケモノに立ち向かえたのは自分が勇者だからと自己完結させ、学校に向かおうと、鞆を持つとする。

しかし、ここに来ておばさんの笑みの意味に気付いた。
「∴カバン、犬にとられたままだ」

とりあえず、謝ろうと考えた勇者だった。

勇者の登校（終）

勇者に大切なものは、『約束を守る忠実さ』と、『わけ隔てなく優しくする慈愛心』、そして『誰にも屈しない正義』なのである。
だが：

「すいませんでしたあ！」

と、犬を気絶させたことについて、飼い主であるおばさんに何度も謝り、しまいには土下座までしたうえで、やっとカバンを返してもらえた勇者だった。

はつきり言ってプライドはズタズタである。

おばさんが勇者を許す時の顔は仏のようにニコニコしていたが、身にまとっていたオーラはどす黒く、一瞬『魔王』の姿を垣間見たほどだった。

「あははー。そりゃ災難だったねー」

登校時間を大幅にロスした（遅刻になるほどではない）ので、少々あせりつつ学校へむかっていた勇者。

そうとうフラストレーションが溜まったためか、彼は道の途中で会った白魔導師（※）のクラスメイトにグチっていた。

※白魔導師（治癒）

医学と錬金術を合わせて実現した魔法使い。

人を治したり異常を見つけてくれることが出来るため、医術に関してはどの科もこの右に出るものはいないといわれる。

あの赤い葉も、メイドイン白魔導師。

「まああの家も魔王の血は受け継いでるらしいからねー。家の目の前にあるのもある意味運命かもねー」

グチっていてなんだが、お前の語尾延ばしと女々しい話し方はど

うにかならないか。ウザい。

とか勇者は思ったが、そんなことは言えなかった。

そう、勇者に大切なものの二つ目は、『わけ隔てなく優しくする慈愛心』である。

「でもその様子だと、僕の赤い葉は大活躍みたいだねー。よかったよー」

「ああ大活躍だ。クソまずいけどな」

ただし気をつけないと慈愛心は瞬時に消滅したりする。

「…ん？」

ふと、何かに気づいた勇者。

勇者は腰に携えた剣（短めの木刀）を抜いた。

“てき”があらわれた。

ゆうしゃのせんせいこうげき！

↓たたかう

たたかう

たたかう

たたかう

ゆうしゃはてきにきりかかった

ミス！てきはにげだした。

「…チッ！逃がしたか」

「あれって隣のクラスの敵さんだよ。なんで勇者くん毎回切りかかるの？」

「え？いやなんとなく」

ここにも慈愛心は存在しなかった。

「まあいいや、早く学校行こうぜ！」

ゆうしゃのがっこうせいかつが、はじまる！

一方、先ほど斬りかかれた敵は、

「なんで：毎回切りかかれるんだろ：」

と不思議に思っていた。

どうやら、敵には“敵”としての自覚はないようだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3079f/>

勇者の一日

2010年10月8日13時16分発行